

## 命は被昇天に流れ込む

### 聖母の被昇天

人生の道は、人が天に上げられることが終点と言えます。イザヤ預言者が、雪や雨の働きをみ言葉の働きに譬えたとき、それを暗示しています。「雨も雪も、ひとたび天から降ればむなしく天に戻ることはない。それは大地を潤し、芽を出させ、生い茂らせ、種蒔く人には種を与え、食べる人には糧を与える。そのように、わたしの口から出るわたしの言葉もむなしくは、わたしのもとに戻らない。それはわたしの望むことを成し遂げ、わたしが与えた使命を必ず果たす」（イザ 55・10 - 11）。この詩的な比喩は、ヨハネ福音書の構造を示してくれます。その福音書の初めに「み言葉は神とともにあった。神の子であって、神の望みを成し遂げるために人間となられた」と記されています。しかも、命そのものでもあったので、ご受難とご復活をとおして、御父の右の座に着かれ、人が天に上げられる道を開いてくださいました。

皆のために開かれた道であるとするれば、当然、聖母マリアの道でもあります。ただ聖書は、その道をより細かく教えてくれます。イザヤにおける雪と雨のイメージが主の昇天を指すように、旧約の契約の櫃は、聖母の被昇天を指しています。ご承知の通り契約の櫃は、金で覆われている木製の箱であり、その中には、モーセがシナイ山で神から受けた十戒の板が納められていました。しかも契約の櫃は、民が荒れ野をさまよう間、神の現存のシンボルでもありました。それを考えるなら、キリスト者は聖母を新しい、永遠の契約の櫃と見なすことは当然だったでしょう。契約の櫃には、律法を記した十戒の板が納められていたように、聖母は、お告げの時から、ご自分の内に、律法そのものである御子イエスを宿しておられたからです。その意味で、旧約の契約の櫃は、聖母マリアを指していたと言えます。

契約の櫃は、方々へ持ち運ばれましたが、その巡礼は、ダビデによってシオンの山の一定の場所に置かれたときに終わりました（詩 132 参照）。キリスト教の伝統では、その移動のことを聖母についての預言とみなしています。つまり、その移動のうちに、地上における状態から究極的な天国へと移られる聖母の被昇天が暗示されています。ところで、契約の櫃は、バビロニア人がエルサレムに入り、神殿を燃やしてしまったときに、消滅してしまいます。そこで、預言者エレミヤが民に向かって、それを悔やまないように勧めたにも関わらず、ユダヤ教の中には、時の終わりに、契約の櫃が再び現れるに違いないという期待がありました。そしてその期待は実現されたのです。つまり、ヨハネが黙示録を書いたとき、神の神殿の中で契約の櫃を見えています。「天にある神の神殿が開かれて、その神殿の中にある契約の櫃が見えた…」（黙 11・19）。それに続く文章は、今日の典礼の第一の朗読にあたるところで、太陽をまとっている女が現れます。それでわたしたちは、その女が人間の姿をした、契約の櫃、つまり聖母を指しているのではないかと考えるでしょう。

そのように考えるのも間違っていると思いません。「太陽をまとう女」というシンボルは、それに含まれているさまざまな要素に従って、非常に豊かな意味を持っています。太陽をまとう女は、当然、創造された最初の女、「すべての命あるものの母」（創 3・20）に関連しています。創世記で、女は蛇から誘惑されるのに対して、黙示録では、あの「年を経た」蛇（黙 12・9）が、竜の形で現れ、女とその子孫を迫害します（創 3・3 - 15、黙 12・17）。彼女は、苦しみながら子供を産みますが（創 3・16）、罪の結果としてもらっていた衣（創 3・7 - 11・21）から解放されて、元来の裸の輝きを獲得し、衣はただの光になります。

一方、女は「頭には、十二の星をかぶっていました」（黙 12・2）。なぜならその女は、シオンの娘、神が選ばれた妻を表し、鉄の杖で国々を治める人（詩 2・9 参照）、つまり、メシアの母を表しているからです。メシアは復活後、神の玉座へ引き上げられた後、女は荒野に導かれます（黙 12・6、13 - 16）。つまり、歴史が終わらないかぎり、新しいイスラエルの代表者である女、「神の掟を守り、イエスの証しを守りとうしている者の母」（黙 12・17）は、悪にそまった「この世」から離れて、全能の神の力で守られます（ホセ 2・16 - 25 参照）。

それらのすべての意味をまとめて解釈する秘訣は、ほかでもなく、それらの意味が流れ込むナザレのマリアです。彼女は、すべての罪から守られながらも、エバの娘であり、メシアをお産みになった方として、イスラエルを代表する最後の具現となりました。また、イエスの弟子たちの母となられた方として、教会の最初の象りかたどりでもあります。すべての国々に、神の契約を伝えるという使命を受けている教会です。やはり、太陽にまつた女は、黙示録のヨハネが天国で見た新しい契約の櫃であると思っても誤りではありません。かえって、無原罪の被昇天を祝うキリスト者にとっては、死後、自分たちを待っている被昇天の預言であると言えるからです。

信仰に照らして、人間の命は被昇天に流れ込むということについて、思いめぐらしました。ヨハネ福音書によって補足されるイザヤ預言書の雪と雨のイメージは、イエスによってその道が開かれ、御父の右の座に着いておられることを意味していると理解できるようになりました。その道が開かれると、イエスの母であり、教会の母でもあるナザレのマリアは、同じ道を歩まれました。それに、黙示録の 11 章の中で、ヨハネが契約の櫃を眺めたことを考えると、マリアは生ける契約の櫃であり、太陽をまつた女であり、頭には 12 の星の冠をかぶっておられ、メシアを産んだイスラエルの最後の具現であると共に、キリストの教会の最初の具現であるという解釈ができます。わたしたちは、自分も被昇天への道を歩んでいると知るなら、希望は強められ、その道も意味に溢れたものになっていきます。

J. E. Perez Valera S. J.